九州看護福祉大学紀要
Vol.15, №1, 81-89（平成26年度）
ISSN 1344-7505

［その他］

診療所における看護師の役割に関する文献的検討

大島　操[1]　新居富士美[2]　安部恭子[3]

【要　旨】

団塊世代の高齢化に伴い、地域包括ケアシステムの構築が推進されているなか、地域で生活する人々にとって身近な存在であるかかりつけ医としての役割を果たしている診療所への期待は大きいと言える。それに伴い、診療所の看護師の役割が重要となると考えられる。そこで、診療所に勤務する看護師に関する研究をレビューし、診療所に勤務する看護師の役割を文献から明らかにすることとした。医学中央雑誌Web版Ver.5（1983年～2013年）を用い、キーワードを「診療所」AND「看護師」AND「役割」とし、抽出された文献から25件を対象に分析した。研究対象とした文献における診療所は、一般診療所、へき地診療所、離島の診療所、在宅療養支援診療所の4つに大別できた。診療所の看護師にはそれぞれの特色を活かした専門性が求められ、特にアセスメント力と健康教育や生活指導などの患者教育の役割が重要であることが示唆された。また、今後、診療所は、地域においてかかりつけ医としての役割を果たすことが期待されており、診療所に勤務する看護師への教育を充実させることが重要となると考えられる。

キーワード：診療所、看護師、役割

【はじめに】

近年、入院日数の短縮による外来通院による患者のフォローや、外来でのがん化学療法、日帰り手術の増加など、外来における看護がますます注目されつつある。関[1)]は、看護が外来診療で実践されるところから、通常診療、救急診療、健康診断、介護支援など地域住民の生活を円滑にするための健康支援を行う場である、と、学問の一領域として看護外来学を提言している。一口に外来といっても特定機能病院から地域の一般病院までその規模も機能もさまざまであるが、患者がまず受診するのは地域の医院またはクリニックといわれる、いわゆる一般診療所である。加藤[2)]は、「診療所外来看護の役割は医療現場の多忙さや医師・看護師の力関係、外来看護の役割・機能の未確立などにより、十分機能しているとは言いがたい。今後専門職として自らが取り組むべき課題であると同時に、医療施策の強化分野として取り組む必要がある。」と提言している。

また、団塊世代の高齢化による高齢者人口の急激な増加とともに、医療ニーズをもつ要介護者の増加が予測されている。平成20年の終末期医療に関する調査では、63.3%の人が住み慣れた家で療養したいと回答した。在宅ケアの必要性が課題となるなか、厚生労働省は平成18年に在宅療養支援診療所の制度を創設し、24時間体制で対応が可能な在宅診療所の整備を進めている。その後、一般財団法人全国在宅医療支援診療所連絡会が設立されるなど在宅医療の推進が図られているところである。在宅療養支援診療所は24時間体制を確保するために訪問看護ステーションと連携をとって在宅ケアを担っている場合が多く、訪問看護ステーションとの連携が重要といわれている。一方、在宅療養支援診療所に勤務する看護師について「医師と訪問看護師の間にあって診療所の看護師の果たすべき役割が明らかでなく、迷いながら仕事をしている状況にある。医師の考えや治療方針を家族や訪問看護ステーションに伝達する上で、重要な立場にありながら、その役割が不明確なところに現在抱える問題があるのではないか。立場

[1] 九州看護福祉大学看護福祉学部看護学科、[2] 亀田医療大学看護学部、[3] 双葉町役場

が医師の影に隠れているため、具体的なコーディネイトを行うのにどこまでリーダーシップをとるべきかが不明瞭である。」と在宅療養支援診療所の看護師自ら問題提起している[3)]。

厚生労働省は、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を推進している[4)]。

さらに、平成23年の介護保険法等改正で、国及び地方公共団体が地域包括ケアシステムの構築に努めるべきという規定が介護保険法に明記された（介護保険法第5条第3項2）。地域包括ケア体制の整備として[5)]、在宅医療の充実、看取りを含め在宅医療を担う診療所等の機能強化、が示されている。今後ますます診療所への期待は大きいと言える。そこで、本稿の目的は、地域で生活する人々にとって身近な存在であるかかりつけ医としての役割を果たしている一般診療所等に勤務する看護師に関する研究をレビューし、診療所に勤務する看護師の役割を文献から明らかにすることである。

【方法】

1. 文献検索から収集・精選までのプロセス

論文の検索には医学中央雑誌Web版Ver.5（1983年～2013年）を用いた。キーワードを「診療所」AND「看護師」AND「役割」とした結果、180件がヒットした。年代別、対象分野別に、図1、図2に示す。これらから抄録のみである学会発表「会議録」はすべて除外し、143件となった。また、キーワードを「役割」とすることで除外される文献があることが考えられたので、次にキーワードを「診療所」AND「看護師」、絞り込み条件を「原著論文」「看護文献」とし、内容把握のため「抄録あり」とした結果149件となった。これら143件と149件の重複を整理し、研究対象が診療所の看護師であるもの、あるいは診療所の看護師に言及しているものを抽出した。なお助産師に関するものは除外して、看護師の業務内容や役割について記載してあるものを最終的に分析対象とした。研究対象者が直接的に診療所の看護師でない場合も、看護師の役割などが導き出されているものは対象とした。以上のプロセスを踏み、分析対象文献は25件となった。

2. 分析手順

抽出した25件を作成した分析シートに従って分類・整理した。論文を熟読し、看護師の役割に関する記載内容を抽出した。（表1）。研究対象とする文献の抽出、分析の過程において、研究者間で合意するまで繰り返し検討を行うことで妥当性を確保した。

3. 倫理的配慮

対象となった文献からの内容抽出においては、文献の論旨や文脈の意味を損なわないように抽出することに努めた。

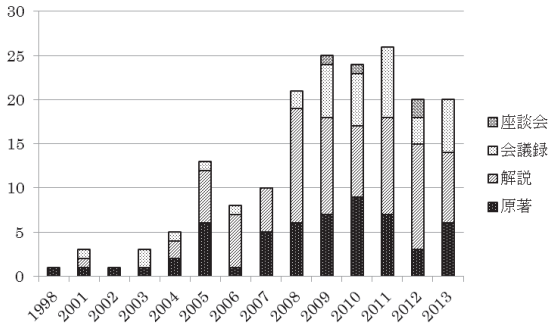

図1.　年代別推移

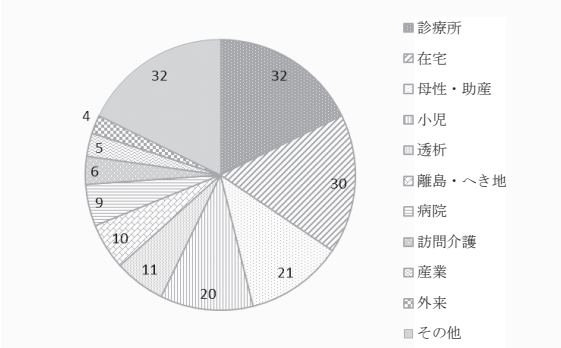

図2. 分野別内訳

【結果】

対象論文における診療所は、一般診療所に関するもの8件、へき地診療所に関するもの10件、離島の診療所に関するもの4件、在宅療養支援診療所に関するもの3件、の4つに大別できた。表1に上記診療所の順に年代別に示す。研究方法は、面接や質問紙によるものが大半であったが、著者自身が勤務する診療所における実践から導かれた看護師の役割に言及する報告もあった。以下それぞれの診療所におけ

る看護の役割について述べる。

1.一般診療所における看護師の役割

臼井ら[6]は、地域の一般診療所であり、糖尿病専門医のいない状況にあって、患者指導に苦慮しながら独自で工夫したツールを使って指導し、その結果看護師に変化が見られたと報告している。また、伊牟田ら[7]は、糖尿病専門の診療所における糖尿病患者に対する患者指導について、看護師が資格を取得したことによってレベルアップがはかれたと述べている。丹治ら[8]は、人間ドックにおける看護師の役割として、採血や血圧測定等の診療の補助に加えて、本来行うべきと考えていることとして健康教室と保健・生活指導をあげていた。人間ドックの役割が疾病の早期発見・早期治療という二次予防から生活習慣の修正による生活習慣病の一次予防へと変わって、保健師や看護師による生活指導の重要性が高まっていると述べている。大津ら[9]は循環器の有床診療所の看護師が行っている再入院予防のための生活指導のポイントを示している。一方、小児看護においても子どもや家族に対する指導助言は重要である[10]。

小酒ら[11]は、成長ホルモン治療など専門性外来における看護師の役割について患者と家族が抱える問題を十分理解したうえで心理的サポートを行っていると述べている。普照ら[12]は、病院から診療所へ体制移行することに伴い看護援助のあり方を検討し、症状悪化を予防することで入院にまでにいたらないよう、予防的なかかわりを意図した相談援助の重要性を述べている。林[13]は、診療所看護職による患者教育について調査した。その結果、看護師は、患者教育は診療所看護の中で大事なことだと思っており、実施したいと回答している。最終的にどのような療養生活を送るかを決めるのは患者・家族自身であるが、診療所看護職者にはその決定に向けての十分な手助けを行なう役割を担う能力が必要ある、と述べている。

2.へき地診療所における看護師の役割

へき地診療所に関する研究は10件[14～23]が抽出された。へき地診療所とは、交通条件及び自然的、経済的、社会的条件に恵まれない山間地、離島その他の地域のうち医療の確保が困難である「無医地区」及び「無医地区に準じる地区」において地域住民の医療を確保することを目的として、都道府県、市町村等が設置する診療所、と定義されている。

へき地診療所の看護師は、【診療所での看護技術・看護業務への戸惑い】【緊急対応への戸惑い】【地域特性がある患者との関係性での戸惑い】【医療環境変化への戸惑い】【看護職をとりまく環境への戸惑い】を感じていた。学習ニードとして【適切な生活習慣を形成・高齢者の生活機能低下予防のための保健指導に向けた学習】【在宅での介護方法や,介護を支える資源理解に向けた学習】【知識・技術のブラッシュアップ】【関係職種と話し合い,共に学び問題に取り組む実践活動】【緊急時の医療対　応に向けた学習】が挙げられていた。特に医師不在時の緊急事態にある人々の健康状態や搬送の必要性を瞬時に見極める力と緊急事態への対処を、医師や周りの人と連携協働しつつ実行する力が必要である、と述べている。

3.離島の診療所における看護師の役割

下地ら[24]や、加藤ら[25]は、離島診療所の看護師に対する研究をおこなった。離島看護師は、都市部看護師と比較して、救急に関するアセスメント・応急処置についての実施頻度は少ないものの、救急患者発生時には確実に実施できなければならないため、基本的な一次救命処置、および特殊な器具が不要な外傷の応急処置をコア技術として身につけておくことが求められる。また、離島に赴任する看護師の教育プログラムには、島の特性に応じた看護、一人配置で行う救急看護、薬剤師代行業務、診療所における地域連携、診療所と派遣病院の関連部署との連携、などが必要で、離島では未経験の診療科でも対応しなければならず、看護師の背景と特性による学習ニーズを考慮する必要があると述べている。離島診療所に勤務する看護師は、離島という環境における独特の役割が求められ、離島における看護師の役割は多岐にわたっている[26)27]。

4. 在宅療養支援診療所における看護師の役割

在宅療養支援診療所は訪問看護ステーションと連携し24時間体制で在宅療養を支えているため、情報

交換といった連携をとる役割がある[28]。川津[29]は、在宅療養支援診療所からの訪問看護ついて述べており、在宅療養支援診療所の看護師は訪問看護師としての役割もある。

森山ら[30]は、在宅療養支援診療所の医師と看護師を対象に調査を行った。その結果、診療の補助、高齢者の健康問題への対応、といった外来機能、に加えて、在宅療養支援診療所特有の役割として、24時間電話対応トリアージ、緊急・急変時の対応、訪問診療（同行訪問）・訪問看護による在宅療養支援、end-of-lifeステージの患者に対して在宅看取りが可能となるような支援、が行われていた。

【考察】

「診療所」というキーワードから在宅支援診療所、へき地診療所などに対する研究が多くみられる結果となった。日本ルーラルナーシング学会が、“へき地（過疎地域、豪雪地帯、山村、離島等）を含む地域の中核病院・保健所等に勤務する看護職やへき地看護学（ルーラルナーシング）に関心を寄せている教育研究者が共に努力し、ルーラルナーシング実践の向上、そのための研究の実施・積み重ねをめざす学会”として、2005年3月に設立された[31]。その後、へき地や離島診療所に関する研究が促進されたと思われる。

また、へき地診療所看護師には、高齢化が進むにつれて在宅療養に関する支援も求められ、学習ニードとして【適切な生活習慣を形成・高齢者の生活機能低下予防のための保健指導に向けた学習】【在宅での介護方法や、介護を支える資源理解に向けた学習】などがあげられたと考えられる。診療の補助、救急時の対応に加えて、生活指導や健康教育を行う役割も重要となっている。

小児、糖尿病、循環器の専門性の高い診療所における看護師の役割は、疾患や対象者による違いはあるものの、患者教育の役割が述べられていた。安田ら[21]は、診療所における外来看護に注目し、受診者の状態をアセスメントできる能力を挙げている。山間地域の診療所は、一次医療機関として診療科目は多岐にわたり様々な症状の、多様な年齢の人が受診する。看護師には、問診の段階で患者の状態を把握して、診察の順序を調整したり、医師に報告して判断を仰いだりすることが求められる、と述べている。これはへき地に限らずどの診療所の看護師にもあてはまり、特に一人で判断する場面が多いと思われる診療所においては、高いアセスメント力が必要となる。廣川ら[32]が、病院の外来看護師を対象に行った研究で、外来看護師が役割を遂行するために活用している能力として導きだされた、「患者の姿勢や言動、表情から瞬時に重症度や緊張度を捉える」と同様の結果と思われる。

今回の結果から、一般診療所、つまり患者にとって身近な、かかりつけ医の役割をはたしているクリニックなどに勤務する看護師を対象とした研究は不充分なことが考えられる。今年度、日本プライマリ・ケア連合学会において「診療所看護師育成を考える」というシンポジウムが開催される[33]。漸く診療所の看護師が注目されるに至ったと言える。

地域包括ケアが推進されるなか、平成26年度の診療報酬改定で、大病院の一般外来を縮小し、患者がアクセスしやすい中小病院、診療所の主治医機能を評価し、地域包括診療料が創設される[34]。今後ますます診療所の役割が重要となり、そこに勤務する看護師の役割が注目されることになると思われる。森山ら[30]は、プライマリ・ケアを担う診療所に勤務する看護師は、これから養成が開始される総合診療専門医と同様、学士レベルから系統だった教育のなかで養成されることが、今後の日本のプライマリ・ケアの質を支えるためにも重要である、と述べている。現在勤務している看護師の継続教育をふくめ、診療所看護師の教育の実態と課題を明らかにする必要があると考えられる。

【まとめ】

研究対象とした文献における診療所は、一般診療所、へき地診療所、離島の診療所、在宅療養支援診療所の4つに大別できた。診療所の看護師にはそれぞれの特色を活かした専門性が求められ、特にアセスメント力と健康教育や生活指導などの患者教育の役割が重要であることが示唆された。しかしながら診療所に勤務する看護師の教育実態の把握と研究が不充分である。よって今後さらに診療所の看護師に関する研究を実施することによって、診療所に勤務する看護師に対する教育を充実させることが重要で

あると考える。

本稿は、第3回日中韓看護学会（ソウル）での発表に加筆修正したものである。

【文献】

1)関美奈子．学問の一領域としての「看護外来学」．看護展望．2011；36(6)：82-87.

2) 加藤恒夫．地域医療最前線の看護師・病診看護連携の現状と将来-診療所外来看護の役割を起点として-．日本看護研究会雑誌．2011; 34(1)：46.

3) 金崎美穂．在宅療養支援診療所の看護師の役割と今後の課題．ホスピスケアと在宅ケア．2008；6(2)：128.

4)厚生労働省ホームページ：地域包括ケアシステム http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/index.html（2013年11月14日閲覧）

5)厚生労働省ホームページ：在宅医療・介護の推進について、在宅医療・介護推進プロジェクトチーム http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/iryou/zaitaku/dl/zaitakuiryou_all.pdf(2014年4月10日閲覧)

6) 臼井 玲華, 角 文乃, 樋口 智恵他．一般診療所外来における変化ステージモデルを活用した糖尿病患者へのアプローチ　行動変容サポート記録シートの作成とその活用の実際．日本糖尿病教育・看護学会誌．2007；11(2)：177-184.

7) 伊牟田重子,良久晴美,武住豊美他．ＣＤＥＪが活動を始めてからの患者教育内容の変化．日本糖尿病教育・看護学会誌．2007；11(1)：36-39.

8) 丹治左奈江,高橋英寿,山門實．人間ドックにおける看護師の役割について．人間ドック．2005；20(3)：42-47.

9) 大津美香,高山成子,渡辺陽子．看護師が診療外来に通院中の認知症を有する高齢心不全患者の疾病管理において抱いている対応困難と支援の実態．保健科学研究．3巻；2013：101-111.

10) 女鹿 瞳, 勝田 仁美, 永島 美香他．小児の診療所における看護の現状と役割認識．近大姫路大学看護学部紀要．2010；2号：59-64.

11) 小酒智美,岡本まゆ美,藤本伸治他．クリニックにおける専門看護-専門医療を支える看護師の役割-．外来小児科．2012；15(2)：194-200.

12) 普照早苗,田内香織,藤澤まこと他．病院から診療所へ体制移行する過疎地域医療機関における看護援助のあり方．岐阜県立看護大学紀要．2008;9(1)：45-51.

13) 林園子．診療所看護職者による患者教育の実態．大阪府立大学看護学部紀要．2209；15(1)：43-52.

14) 戸田由美子, 坂本雅代, 齋藤美和他．へき地診療所における看護実践上の戸惑い．高知大学看護学会誌．2012；6(1)：21-31.

15) 坂本雅代,戸田由美子,平瀬節子他．へき地の診療所における看護者の看護実践力を高めるための学習活動の実態調査．高知大学看護学会誌．2011；5(1)：53-58.

16) 佐々木祥子．へき地診療所における子どもへの看護に関する研究．日本ルーラルナーシング学会誌．2011；6巻：51-64.

17) 春山 早苗, 田村 須賀子, 鈴木 久美子他．へき地診療所における医師と看護師との連携に関する研究．日本ルーラルナーシング学会誌．2011；6巻：35-49.

18) 坂本雅代,戸田由美子,平瀬節子他．へき地の無床診療所における医師不在時の緊急対応の看護技術．高知大学看護学会誌．2010；4(1)：13-20.

19) 亀井彩加,大竹まり子,赤間明子他．診療所看護職の看護活動と自律性-東北地方Ａ県における都市部とへき地の比較-．北日本看護学会誌．2010；13(1)：61-68.

20) 塚本友栄, 小川貴子, 工 奈織美他。へき地診療所看護職の学習ニード．日本ルーラルナーシング学会誌．2010；5巻：1-15.

21) 安田貴恵子, 御子柴裕子, 小林理恵子他．山間地域の診療所における看護師の役割　一診療所の外来受診者と看護師に対する調査から．長野県看護大学紀要．2008；10巻：89-100.97-98.

22) 小林 文子, 吉岡 多美子, 大平 肇子他．ルーラルナースの教育プログラムの検討．地域医療．2005；第44回特集号：165-167

23) 鈴木 久美子, 田中 幸子, 岸 恵美子他．へき地診療所において発展させるべき看護活動．自治医科大学看護学部紀要．2004；2巻：5-16.

24) 下地千里,神里みどり．離島診療所に赴任する看護師に対する教育プログラムと支援体制．沖縄県立看護大学紀要．2013；14号：43-55.

25) 加藤 美佐代, 横内 光子．離島へき地診療所で働く看護師に求められるアセスメント・応急処置．日本救急看護学会雑誌．2010；12(2)：11-20.

26) 中尾　八重子.　訪問看護ステーションのない離島における高齢者の療養場所移行の特徴と看護職の役割. 日本ルーラルナーシング学会誌. 2008；3巻：49-59.
27) 大湾明美,坂東留美,佐久川政吉他. 小離島における「在宅死」の実現要因から探る看護職者の役割機能-南大東島の在宅ターミナルケアの支援者たちの支援内容から-. 沖縄県立看護大学紀要. 2008；9号：11-19.
28)藤川あや,小林恵子,飯吉令枝他. 新潟県内の訪問看護ステーションと在宅療養支援診療所の連携の実態. 新潟医学会雑誌. 2011；125(9)：498-506.
29) 川津有紀. 安心して在宅医療が継続できるよう明確な治療方針に沿った訪問看護を提供. コミュニティケア. 2010；12(10)：29-33.
30) 森山美知子,松浦亜沙子. 総合診療専門医と協働するプライマリ・ケア診療所の看護師の役割と教育. 病院. 2013；72(12)：971-975.975.
31) 日本ルーラルナーシング学会ホームページ：
http://www.jasrun.org/ (2014年2月10日閲覧)
32) 廣川恵子,大久保八重子,植田喜久子. 看護実践から見出した外来看護師の能力. 日本赤十字広島看護大学紀要. 2008；8巻：21-29.
33) 第5回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会ホームページ:
http://www.clinkage.co.jp/jpca2014/files/program0510.pdf (2014年3月20日閲覧)
34) 厚生労働省ホームページ、平成２６年度診療報酬改定の概要、厚生労働省保険局医療課、２年４月３日版
http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12400000-Hokenkyoku/0000039891.pdf (2014年4月30日閲覧)

表1．対象文献　その1

タイトル	年	研究方法	対象者	役割に関する記載内容の抜粋
看護師が診療所外来に通院中の認知症を有する高齢心不全患者の疾病管理において抱いている対応困難と支援の実態	2013	質問紙 自由記載	全国の循環器の有床診療所 外来で認知症を有する高齢心不全患者の看護経験のある看護師	悪化予防及び悪化時の具体的な指導、症状や検査結果などの客観的な情報を活用した悪化のアセスメント、通院間隔を短く管理すること、が再入院の予防。穏やかな態度で接すること、安全・安心して治療を受けられるようにすること。家族や施設職員への疾病管理の支援の依頼を通してわかりやすい療養生活管理の指導、薬の飲み忘れ防止に向けた指導、が行われていた。
クリニックにおける専門看護-専門診療を支える看護師の役割-	2012	実践報告	こどもクリニックの看護師	一般診療以外に発達外来と療育、喘息外来、夜尿症外来、スキンケア外来、乳児健診、予防接種、成長ホルモン治療を実施。専門的知識と技術の習得、患者管理、継続治療を行うためのシステム作り、管理を容易にするツールの作成、他院との連携、医師との円滑なコミュニケーション、治療を受けるこどもと家族への支援、スタッフの育成
小児の診療所における看護の現状と役割認識	2010	質問紙	小児の診療所に勤務している看護師	看護の役割としての認識が特に高い項目は、診療前の間接的業務、診察・処置・治療時の子供・親への説明援助と理解度の確認、安全・安楽の援助、これらは看護業務の実施頻度も高い。実施頻度の低かった訪問看護や継続的に療養の必要な子供に ついての看護援助などについては、看護の役割であると回答した割合が高く、現状と認識に差がみられた。
診療所看護職者による患者教育の実態	2009	質問紙	無床診療所の看護師	患者教育は診療所看護の中で大事なことだと思う99.1%。患者教育患者をしていきたいと思う99.1%。最終的にどのような療養生活を送るかを決めるのは患者・家族自身であるが、診療所看護者にはその決定に向けての十分な手助けを行なう役割を担う能力が必要
病院から診療所へ体制移行する過疎地域医療機関における看護援助のあり方	2008	半構成的面接	患者 病院看護師	身近な存在である看護師による一言によって、普段の体調や生活状況を自己確認し、症状悪化前に予防をすることで、入院に至らない状態を保持することができる。予防的なかかわりを意図した相談援助。近隣病院と診療所との地域連携
ＣＤＥＪが活動を始めてからの患者教育内容の変化	2007	実践報告	糖尿病専門の有床診療所	一方的な知識の伝達というスタイルから、患者と一緒に考え、患者自ら体験することで、患者は検査結果の見方や自分の治療法や自己管理方法を見出すことができた。
一般診療所外来における変化ステージモデルを活用した糖尿病患者へのアプローチ	2007	実践報告	看護師	一般診療所においても、糖尿病管理をするうえで糖尿病患者への心理的ケアを担う役割がある。看護師は心理的ケアに着眼する必要性を認識していても、その場限りのマニュアル的教育しかできていなかった。変化ステージのモデルに基づいたケアを実践することで、患者を信頼するというエンパワーメントの課程を必要条件が看護師に備わった。
人間ドックにおける看護師の役割について	2005	質問紙	人間ドック指定病院の看護師	行っている業務は採血・注射・血圧測定がも最も多いが本来行うべき業務として、健康教室と保健・生活指導と回答した。た。診療の補助という従来からの業務に加えて保健師業務や渉外活動など幅広い業務への対応が求められている。
へき地診療所における看護実践上の戸惑い	2012	半構成的面接	へき地診療所の看護師	診療所での看護技術・看護業務への戸惑い。緊急対応への戸惑い。地域特性がある患者との関係性での戸惑い。医療環境変化への戸惑い。看護職をとりまく環境への戸惑い。
へき地診療所における看護者の看護実践力を高めるための学習活動の実態調査	2011	半構成的面接	へき地診療所の看護師	生命確保への技術訓練。健康課題対処法の学習。多業務遂行上の安全知識の学習。職種間での共有化による学習。救命救急の看護技術の学習。診療の補助技術の学習。最新のへき地・地・看護の学習。地域資源活用での学習。資格継続への学習。学習へのニーズとしては、看護技術へのサポート、実務に反映される学習内容、新しい概念、が導かれた。日々看護の基礎となる技術や概念などについては、より新しい知識や技術への支援を望んでいる。

表1. 対象文献　その2

タイトル	年	研究方法	対象者	役割に関する記載内容の抜粋
へき地診療所における子どもへの看護に関する研究	2011	質問紙	へき地診療所の看護師	へき地診療所において子どもに関わる機会が少なく子どもの看護の経験も少なかった。実施頻度が高かったのは、子どものプライバシーの保護をする、親の安心や不安の軽減のための援助をする、であった。
へき地診療所における医師と看護師との連携に関する研究	2011	半構成的面接	へき地診療所の看護師と医師	連携による活動内容には、外来患者管理、緊急時の初期判断・初期対応、ターミナル及び看取りへの対応、があり,背景には,「医師が常駐しておらず、診療所看護職以外に当該地域に保健医療福祉介護の常勤従事者がいないこと」等があった。連携による活動を可能とすることには,「医師と看護師がよくコミュニケーションを図り患者の状況を共有していること」等があった。連携による活動の課題は,緊急時の初期判断・初期対応のためのプロトコル整備,診療所看護師に求められるスキルの向上と現任教育体制づくり,医師との連携による看護師の活動に対する評価
へき地の無床診療所における医師不在時の緊急対応の看護技術	2010	半構成的面接	へき地無床診療所	急激に生じた健康状態の変化を把握する。緊急受診搬送への見極めをする。健康悪化に対する救急処置を実施する。遠隔地にいる医師と連携をとる。緊急時周りの人々の持てる力を得。緊急受け入れに向けた調整をする。緊急事態にある人々の健康状態や搬送の必要性を瞬時に見極める力と緊急事態への対処を、医師や周りの人と連携協働しつつ実行する力が必要である。
診療所看護師の看護活動と自律性-東北地方A県における都市部とへき地の比較-	2010	質問紙	へき地診療所の看護師	診療所看護職の自律性合計得点が病院の看護職者より低かった。自律性が意識されてないことが可能性がある。地域住民に身近な診療所の役割が拡大することが予測され、診療所看護職自身が自律性を意識化し、専門性高めることが重要。診療所看護職の看護活動として、多職種との連携をはかることの必要性が示唆された。
へき地診療所看護職の学習ニード	2010	質問紙	へき地診療所の看護師	【適切な生活習慣を形成・高齢者の生活機能低下予防のための保健指導に向けた学習】【在宅での介護 方法や,介護を支える資源理解に向けた学習】【知識・技術のブラッシュアップ】【関係職種と話し合い,共に学び問題に取り組む実践活動】【緊急時の医療対 応に向けた学習】などの31項目の学習ニードが明らかになった。
山間地域の診療所における看護師の役割	2008	質問紙と面接	へき地診療所に指定されている国保診療所の看護師と受診者	役割は【診療の流れに合わせて看護を行う】【受診者との関係を築く努力】【受診者の安全と安心を考慮した状況判断】【受診者の利便性の配慮】【受診者一人ひとりを大切にした対応】気持ちがよく、安心できる対応。コミュニケーションをとりやすい。気持ちが軽くなる。治療に関連する説明や技術が確実で安心。受診者の対場に立った指導。生活や家族への気遣い。チームワークがよい。改善してほしいことは、問診を他の受診者のいる待合室でなく別の場所で行ってほしい。
ルーラルナースの教育プログラムの検討	2005	半構成的面接	へき地診療所の看護師	教育プログラムとして以下の10項目が抽出された.1)地域性を踏まえた救急現場での対応.2)看護指導技術能力.3)あらゆる年齢,疾患,状態としての健康レベルを対象とした看護過程の展開.4)地域のスペシャリストとしての地域住民の人間理解の重要性.5)慣習.6)価値観.7)地域の健康状態.8)コミュニティーにおける高齢者ケアシステムの充実.9)研修機会の少ない場における自己啓発.10)ルーラルナースに求められる独自の役割
へき地診療所において発展させるべき看護活動	2004	面接	へき地診療所の看護師	1)地域社会の共同生活のあり様を把握し,それを基盤とした看護活動,2)在宅ケアチームの一員としての関係機関との連携,3)地域住民の健康問題を共有し,地域住民の健康レベルの向上に向けた市町村保健師との共働活動,4)身近な相談機関としての健康生活支援,5)迅速かつ的確な判断に基づく医師不在時や救急時の対応と拠点病院との連携

表1. 対象文献　その3

タイトル	年	研究方法	対象者	役割に関する記載内容の抜粋
離島診療所に赴任する看護師に対する教育プログラムと支援体制	2013	研修を実施後に面接	診療所派遣病院の離島支援開発委員会。診療所看護師	教育プログラムには、島の特性に応じた看護、一人配置で行う救急看護、薬剤師代行業務、診療所におおける地域連携、診療所と派遣病院の関連部署との連携、看護師の背景と特性、がコア内容
離島へき地診療所で働く看護師に求めれらるアセスメント・応急処置	2010	質問紙	全国の離島へき地診療所の看護師	離島看護師は、都市部看護師と比較して救急に関するアセスメント・応急処置についての実施頻度は少ないものの、救急患者発生時には確実に実施できなければならない。離島に勤務する看護師は、基本的な一次救命処置、および特殊な器具が不要な外傷の応急処置をコア技術として身につけておくことが求められる。
訪問看護ステーションのない離島における高齢者の療養場所移行の特徴と看護職の役割	2008	事例研究	療養場所を移行した離島の高齢者118名の移行状況	診療所が療養場所の要で、高齢者の一時保護の役割も果たしていた。専門医療機関やリハビリ施設がないため島外に移行せざるを得ない。看護者の役割や今後の課題は、(1)地域包括支援セン ターの活動とのすりあわせ、(2)医療機関の看護者も予防の観点からのケアと家族への指導、(3)島内の看護者間の連携、(4)住民にヘルパーへの理解を 得る働きかけとヘルパーへの教育、(5)島外移行者への支援である。
少離島における「在宅死」の実現要因から探る看護職者の役割機能	2008	面接	在宅ターなるケアに関わった支援者	保健師と診療所の准看護師は、直接ケア、調整、相談、教育の4つの機能を活かした看護実践を展開していた。小離島における在宅ターミナルケア実現に向けた看護職の役割は、看護の4つの役割機能を発揮することであり、特に調整役が求められている。
総合診療専門医と協働するプライマリ・ケア診療所看護師の役割と教育	2013	面接 参加観察	在宅療養支援診療所の医師と看護師	プライマリ・ケア診療所看護師の担う役割は、外来機能、在宅支援機能、地域支援機能、診療所をﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄする役割。現在はできていないが本来はこうあるべき、こうしたいという理想形を含め抽出された。
新潟県内の訪問看護ステーションと在宅療養支援診療所の連携の実態	2011	質問紙	訪問看護ステーションの管理者	主治医が多忙で直接報告や相談ができない場合は「医療機関の看護師と話し合う」ことで【在宅療養支援診療所の看護師との療養者に関する情報共有】を行っていた。
安心して在宅療養が継続できるよう明確な治療方針に沿った訪問看護を提供	2010	実践報告	無床の在宅療養支援診療所	診療所からの訪問看護に求められているものは、在宅で安心して療養・治療の継続を行えるために診療の補助を中心とした役割を全うすること。診療所の訪問看護師も、ステーションの訪問看護師も、同じ地域看護を提供している看護師として、相手を知り認めることで、役割分担がより明確にでき、それぞれの専門性を生かすことにつながる。